

## 高校・一般の部 優秀賞

小山 時夫

野坂昭如さんの「風になったお母さん」の小説に、こんな一節があります。「お母さんは自分の汗を5歳の息子の身体に塗って、焼夷弾の熱から守ろうとする。汗が尽きると涙を塗った。折角産まれてきて美味しいものも食べず、玩具だって遊園地だってよく知らないまま死んでしまうのか」と。

子供の生涯にわたる無事を親は念じ、そのために汗も涙も流し、自分より早く死ぬなど誰もが願っています。ですが、この思いが理不尽に断たれるのが、事故や災害、そして戦争です。

「心おきなくお国のため、名誉ある戦死をして来なさい」などと、心から思う親はいなかったはずですが、戦争はそれを当たり前にしてしまうのです。

私はこの事実を今から七十五年前の昭和十六年、小学校一年生の時に目にしました。それは、私の五番目の兄が尋常高等小学校2年生卒業（現在の中学二年生で十四歳）の時の出来事です。国策とはいえ、兄の担任の先生が、国や親、兄弟姉妹を守るため軍人になるよう、海軍予備学生の試験を受けさせなさいと再三にわたり両親を説得に来ていたことを今でも覚えています。結局兄は試験を受け、15歳で海軍に入隊しました。両親は親よりも早く死んで良い親不孝を認めたのです。

このように、人の心まで変えてしまうのが戦争であることを知ってもらいたいです。